

床尾山系を中心とした ムカシトンボの生息状況

山崎喜彦

はじめに

1990年の床尾山系を中心としたムカシトンボ調査は、主に2つの目的で行った。1つは、これまであまり成果があがっていなかった成虫の確認である。他の1つは、幼虫の確認をより広い範囲で行ない、生息状況をさらに広くつかむことである。

成虫の調査は、4月25日より6月20日までの間に合計19日行い、延べ71個体が目撃され、うち8♂♂を採集した。

幼虫の調査は、3月4日より12月30日までの間に合計13日行い、計165個体の生息を確認し、うち終齢（14齢）幼虫1♂5♀♀を採集し、飼育している。

調査範囲は、1989年までに調査した、糸井川・東河川・米地川・板生川・河本川・畑川・水石川・長谷川・桐野川・中野川・上野川・百合川・奥山川に加え、石和川・大藪川・大江川・岩崎川・浅間川・菅川・谷山川・円山川の他の小支流にまで広がった。実際のところ、床尾山系から外れている河川も幾分含まれる。

ムカシトンボの生息状況

（1）成虫による確認

1990年における成虫の調査方法は、上記のすべての河川を限られた出現時期にまわり、成虫を目撃しようというものである。1989年までに幼虫の生息が確認されている河川では、予想以上に多くの場所で、成虫の生息が確認された。

1989年までに幼虫の生息が確認できていなかった河川での成虫の確認は、大藪川の大藪1カ所だけであった。

1990年に新たに成虫の確認ができた場所は、糸井川では和田・市場・寺内の3カ所、東河川では白井の1カ所、米地川では下戸・高中の2カ所、板生川では現世・羽白・三谷の3カ所、河本川では西谷の1カ所、畑川では畑・水石の2カ所、百合川では百合の1カ所、奥山川では和屋の1カ所、大藪川では大藪の1カ所である。合計すると、新たに9河川で15カ所の確認が行えた。

(2) 幼虫による確認

1990年度の幼虫調査は、1989年までに幼虫の生息が確認されていない河川で行った。1989年までに幼虫の生息が確認されている場所での調査は、羽化の観察のために終齢幼虫を採集することをねらいとして、糸井川の市場の1カ所だけで行った。

1990年に新たに幼虫の生息が確認された場所は、糸井川では内海で3カ所、石和川では岡で2カ所、米地川では奥米地で4カ所、高中で2カ所、中米地で1カ所、鉄屋米地で1カ所、奥山川では奥山で3カ所、和屋で1カ所、大江川では大江で1カ所であった。合計すると、新たに5河川で18カ所の確認が行えた。

1990年までに行った調査結果から、米地川においては調査した支流のすべての場所で幼虫が確認された。さらに丁寧に調査すれば、個体数は多いと考えられる。

糸井川の内海では、1989年までに他の溪流において、すでに幼虫の生息が確認されていた。1990年における調査は、その溪流近くの別の溪流であり、ワサビが多く生育しているため、幼虫の生息が以前から予想された場所である。

奥山川では、1990年までに上流域にある溪流のすべてで幼虫の生息が確認された。しかし、榎見を流れる溪流と中村を流れる溪流とでは、確認されなかった。

大江川では、幼虫の生息が確認されたが、岩崎川では確認されなかった。両河川は途中で合流しており、ともに同じぐらいの流量である。

菅川・浅間川の各支流においても調査を行ったが、幼虫の生息が確認されなかった。

他に、八鹿町坂本と舞狂の間を流れて円山川に合流する小流と、和田山町林垣と養父町大塚の間を流れて円山川に合流する小流でも調査を行ったが、幼虫は確認されなかった。

1990年までに床尾山系を中心とした河川での、ムカシトンボの生息調査の結果をまとめたものが、Fig. 1である。ここでは、幼虫と成虫の生息が確認された場所を表した。糸井川の源流域における成虫の確認も数多くなされているが、表現上無理があるので、この場所では幼虫の確認結果だけを表した。

産卵調査も行っているが、1990年まででは、産卵が確認された全ての場所で、幼虫の生息が確認されている。

おわりに

床尾山系のほとんどの河川において、ムカシトンボの生息が確認された。ムカシトンボ幼虫は、各河川の源流域に生息している場合が多いが、糸井川・板生川等の例のように、人家のすぐ上流に生息している例も比較的多い。このような幼虫の多くは、流量が急激に増えたときなどに、上流より流された個体と考えられる。しかし、なかには人為的に産卵対象となる植物であるワサビが栽培されており、ムカシトンボの生息を、結果的には人間が手助けしている例も見受けられる。

標高でいうと、東床尾山の頂上付近の700mあたりを流れる溪流から、米地川の鉄屋米地、糸井川の寺内・市場のように、100mくらいの低地を流れる河川にまで、幼虫が生息しているのが確認された。

また、成虫はその出現期間が短いこともあり、これまであまり確認されていなかったが、幼虫の生息している溪流にポイントをおいて調査すれば、容易に確認できることが分かった。

今後も、さらに調査を継続して行きたいと考えている。

参考文献

- 上田尚志・山崎喜彦（1985）但馬地方におけるムカシトンボの記録，
IRATSUME 8・9:39-46.
- 山崎喜彦（1985）和田山町糸井溪谷におけるムカシトンボ，
IRATSUME 8・9:47-55.
- 山崎喜彦（1986）和田山町糸井溪谷におけるムカシトンボの観察記録，
IRATSUME 10:96-113.
- 山崎喜彦（1987）和田山町糸井溪谷のムカシトンボの観察記録，
IRATSUME 11:1-18.
- 山崎喜彦（1988）和田山町糸井溪谷のムカシトンボの調査・観察記録（1987年），
IRATSUME 12:37-56.
- 山崎喜彦（1990）糸井川を中心とした床尾山系における
ムカシトンボの調査・観察記録， IRATSUME 13・14:53-69.
- 山崎喜彦（1990）床尾山系におけるムカシトンボの調査・観察記録。
IRATSUME 13・14:79-91.